ART KISS LETTER

Contemporary Art Museum, Kumamoto

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

vol. 17

2003.4.15 熊本市現代美術館発行

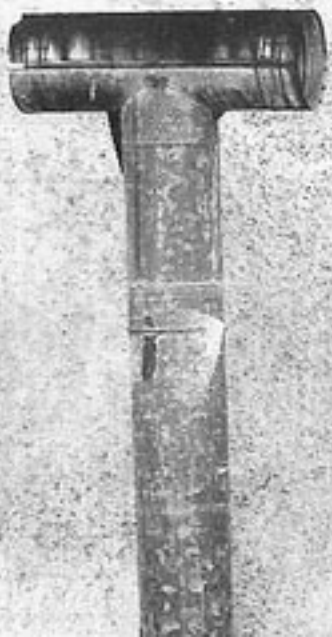


Photo by KAZUSHI MATSUNAGA

2002.10.1～2003.3.31のギャラリー展評

【アート・ド・ギャン】 ART DE GYAN

※もう、おわかりですよね！熊本弁で「アート、どう？」の意です。

熊本県立美術館分館・本館

熊本市千葉城町2-18　☎351・8411（分館）
熊本市二の丸2　☎352・2111（本館）

● **「第2回滴翠会展」**（10.8～10.14）日展会友の書家・徳田翠雨さんが指導する10人が30点を展示。古典をベースに自分の新たな世界を創造していくという。漢字は中国の「文選」の詩を2×8尺で見せ、金子みすずの詩と自由課題を調和体作品等にしている。徳田さんは、みすずの詩を6×6尺のパネルに、とつとつと書いて余白を生かしていた。

● **「第7回独立書人団熊本支部書展」**（12.10～12.15）独立書人団熊本支部の会員35人が68点を展示。漢字の大字書や多字数作品や篆書等と小品額35点を見せる。超濃墨の力強い作品や、にじみのきいた淡墨の大作は豪快でインパクトがある。徳永典鶴支部長はじめ前川祐子さん、大森澄子さん、中村太湖さんの作品が見られた。（S.K）

● **「第30回記念熊本県書道連盟展」**（12.10～12.15）熊本県文化協会と熊本県書道連盟が主催する30回記念展で、今年は例年の連盟展に加えて、これまで功績のあった「先達の書」を特別展示した。役員および選抜会員の作品には流石（さすが）に眼を引くものが多かったが、久しぶりにお目にかかる先達の書に、往時の仕事の確かさを見せてもらってありがたかった。（T.M）

● **「第3回春清書作展」**（12.17～12.23）井上春嶽さん、川上清泉さん2人の書家の門下生等の75人が77点を軸や額で展示。作品は、漢字・行草書体が多く、調和体や「かな」もある。漢字多字数の大作は、2×8尺が9点もあり、静謐（せいひつ）で明るい会場となっている。杉本研心さんや槇松秀岳さんも見られた。浦川草径さんも招待出品していた。（S.K）

● **「第43回熊日書道展」**（12.17～12.23）熊本県には全国でも珍しく「県展」がないからか、報道機関である熊日が主催する熊日書道展には特に人気があるようだ。受賞作はそれぞれに独自の活力ある書美を追求していて参考になるし、委嘱および無鑑査作家にはそれ相応の年輪がうかがえて楽しめる。（T.M）

● **「第25回尚絅大学書道展」**（12.3～12.8）尚絅大学書道課程の在学生57人と卒業生36人に8人の先生が額やマット等で展示。在学生は漢字や「かな」の臨書作品で、卒業生は授業もある。2年生の大作（約3x6メートル）はダイナミックな明るい作品群で若さがあり好感がもてた。（S.K）

● **「第5回玄泉全国展」**（1.7～1.13）玄泉書道会（浦川草径さん主宰）が、雑誌『玄泉』の購読者とその指導者を対象とした展覧会である。指導者賞の多さが目立ったが、大きな組織を運営する指導歴の経営手腕には敬服している。（T.M）

● **「第18回汲古会書作展」**（1.15～1.19）かな書道の汲古会会員45人で55点のかなや調和体作品等を展示。汲古会会長の那須琢石さんは、良寛の春の歌を大作扇額にしている。新春にちなんで春の歌や句をテーマとしているだけに、作品は明るく春ののどけさを思わせる会場となっている。中村天香さんも賛助出品していた。（S.K）

● **「第38回県高等学校書道展」**（1.21～1.26）県内の公立私立合わせて46高校が、書道の部活や授業の成果を発表する場である。漢字・かな・調和体、刻字など、若者らしい活力を漲（みなぎ）らせて逞（たくま）しく表現している。各校の合作もあり、先に行われた席上揮毫（きごう）会の優秀作品も並べられた。教職員の作品も変化に富んでいて楽しい。（T.M）

● **「書団連選抜臨書展」**（2.4～2.9）関係各団体から推薦を受けた94名が、中国および日本歴代の書の名作を学んだ成果を発表する臨書展である。過去に「臨書は発表する作品に値するか？」と批判を受けたこともあるが、書体書風の多様性、時代の流れが伺（うかがい）えておもしろいし、出品者のレベルアップにずいぶんと貢献しているようである。（T.M）

● **「第10回研翠楷書展」**（3.4～3.9）書家の田内研水さんが主宰する研翠会員ら46人が軸や巻子本、額装など52点を展示。2.7x1.8メートルのパネルの大作は、31人の和歌や俳句のかなの合作で目立った。田内さんは大谷句仏の句に淡墨の百人一首を添えて、対比の面白さを見せていた。中村天香さんは若山牧水の歌2首を賛助出品している。（S.K）

● **「村田迪夫（鼎生）個展」**（2.25-3.2）峠や渓谷といった風景から抽象まで、近年の作品を振り返る構成。

● **「第15回朱土会日本画展」**（2.25-3.2）市民会館他4ヶ所で、西村淳さんが指導する同会。どの作品も細部まで丁寧に描きこまれ、それぞれの作品に対する思いが伝わってくる。そのひたむきさが、さわやかに心を打つ。（A.S）

● **「第22回卒業制作展」**（2.25～3.21）尚絅大学の国文科に書道コースが誕生して第7期生。19名が古典の臨書と創作、また創作のみの各2点を出品した。ほぼ1年かけて練り上げた作は、大小こもごも、それぞれ若さ溢（あふ）れる力作揃い。オブジェにも挑戦しており、観客を楽しませた。（T.M）

● **「国際バリアフリーアート熊本展」**（2.25～3.2）思い思いに描かれた大凧が印象的な会場。中国で初めてという国際障害者絵画展と同時開催の国際凧あげ大会への出品作。時に大胆で、緻密で、鮮やかな作品の向こうにある、作者たちの様々な表情までが浮かんでくるようだ。

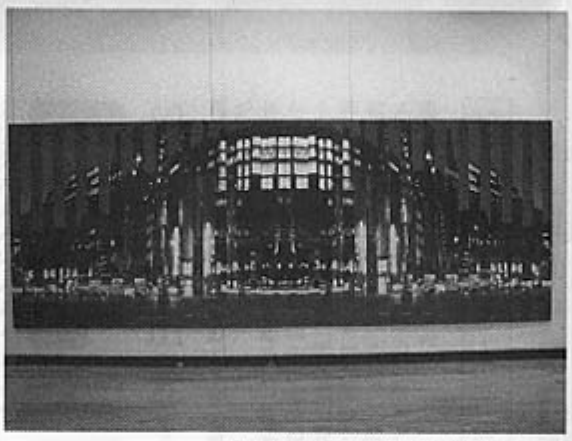
● **「ZERO WORKS EXHIBITION 熊本デザイン専門学校第8回卒業制作展」**（2.25～3.2）グラフィックは例年通り一定の水準をクリアする中、刺繍などの手仕事を交えた表現に新鮮さを感じた。ファッションでは、白い方形の皮をパッチワークし迷彩とあわせた岩崎弘規さん、カットや細部にこだわりのみえる松岡裕也さんのロングコート、インテリアでは実作した椅子などが目を引いた。

● **「第14回尚美展」**（3.4～3.9）尚絅大学・同短大の教職員、卒業生、在校生による展示。津川敬子さんの《Flower and Dream》は、作者のやさしいまなざしがあふれる。

「第14回尚美展」津川敬子さんの作品《Flower and Dream》

● **「熊本大学教育学部美術科在科生展」**（3.4～3.9）それぞれが独自の世界を探っている。片白暁江さん、中村由佳里さんの小品の連作は、既に表現したいものを見つけている。福永眞二さんの《through the interruption》は荒削りながら、今後の展開に注目したい。

● **「熊本大学教育学部美術科卒業修了制作展」**（3.4～3.9）絵画、写真、彫刻、工芸、研究論文が並ぶ。山本清さんの《structure》《都市の幻影》は、「見せ方」を心得ている。見慣れた日常の風景にスラッシュを入れ、新たな世界景を提示している。



熊本大学教育学部美術科卒業修了制作展」
山本清さんの作品《都市の幻影》

● **「熊工会美術展」**（3.11～3.16）油彩から書、写真まで幅広く展示された。

● **「NHK熊本文化センター写真講座作品展」**（3.11～3.16）基礎から技法まで、徐々に技術がついていく様が興味深い。（A.S）

熊本市民会館

熊本市桜町1-5　☎355・5253

● **「第2回『春風』書作展」**（10.31～11.4）書家の大堂喜三子さんが指導する16人の作品52点を、軸や額装で展示。漢字やかなは、古典の臨書で、創作の近代詩文書や、自作の川柳なども見られた。大堂さんは裏将軍や雅色紙の臨書に、清水祐子の歌を書いている。井上享子さんも賛助出品していた。（S.K）

メガネのヨネザワ本館

熊本市水前寺6-1-38　☎383・5111

● **「第36回新春抱月会書道展」**（1.2～1.8）仮名書家・井田峰月さん主催の抱月会会員60名が自詠歌を含めて、私歌、俳句、古筆の臨書を出陳した。永年熊日画廊の新春を飾る展覧会として知られてきたが、止むなくヨネザワ本館に移したものである。（T.M）

熊本伝統工芸館

熊本市千葉城町3-35　☎324・4930

● **「甲斐武　木の仕事」**（2.18～2.23）木工芸家の甲斐武さんによる作品展。盾や盆、酒器などが展示された。中でも3～4cmの大きさの「豆鉢」のシンプルなフォルムに心引かれた。

● **「肥後藍御船工房　藍染と草木染展」**（2.18～2.23）自然の色を生かした服やのれん、アクセサリーなどの展示。

● **「テーブルコーディネート　グループ展」**（2.18～2.23）本田和子さん、影下佳子さん、河村千春さん、田尻美枝子さん、野瀬幸子さんによる、テーブルコーディネートの展示。ステンドグラスの教室を持っているという田尻さんのテーブルには、自作の箸置きや器が置かれ、完璧なコーディネート。他のテーブルもくつろぎのひとときを演出する工夫が多数提案され、非常に見ごたえのある内容だった。（K.K）

「テーブルコーディネート　グループ展」展示風景

画廊喫茶三点鐘

熊本市手取本町3-8有明ビル　☎326・3040

● **「煤黠書画展」**（1.4～1.10）井上春嶽さん、川上清泉さん両書家のグループ12人が、24点を軸や額装にしての小品展である。水彩や水墨画に、与謝野晶子の歌や、扇面の「和気」等、それぞれのもち味を出し、表具も工夫して楽しい会場となっていた。（S.K）

● **「坂本福治個展」**（2.19～2.28）山頭火が人吉で詠んだ俳句を版画に記し、俳人のさすらう姿を彫りこんだ作品を展示。淡い虹のような色彩で着色されることで、山頭火の俳句にある虚無的な雰囲気を活かし、幻想的な夢を思わせる作品となっている。

● **「開店15周年記念企画　武蔵イメージ展」**(3.1～3.8)大河ドラマの放送もあり、本年は「武蔵年」の印象が強いが、この展覧会に出品した、書・洋画・木彫などを見ると、紋切り型の「武蔵」の姿を超え、それぞれの想う「武蔵」がそれぞれの表現であらわされており楽しめた。
● **「～四人展～」**(3.17～3.24)西山敏雄さん、浦田正利さん、佐藤孝之さん、高橋威文さんによるグループ展。風景、人物、花などを具象で描いた油彩の作品が並ぶ。西山敏雄さんの厚みのある筆のタッチが印象的だった。(H.T)

アートスペース大宝堂

熊本市上通5-6　☎354-2155

● **「書画発散展」**(2.5～2.10)書家野口翠山さんの11回目の個展。今年83歳で発散展とした。昨年夏以降の新作60点の書と画を額や軸で展示。宮本武蔵の戦気と人物像のコピーや、金子みすずの詩などの調和体もあり楽しい会場である。須崎海園、江上貴熊さんも賛助出品していた。(S.K)
● **「伍水堂EXHIBTION～書道用品+遊ぶ。～」**(2.26～3.3)島田有子さん(写真)・許斐良助さん(陶芸)・森内和久さん(インスタレーション)の3人が、伍水堂での出会いから始まった企画展。書道用品としてではなく、それを使って「真剣に遊ぶ」行為の中で生まれた、今まで見せたことのない表情で道具たちが存在感をアピールした新しい空間が会場いっぱいに広がっている。(R.Y)
● **「第4回書芸『風』展」**(2.19～2.24)書家丸山三千代さんが指導する23人の作品と丸山さんの新作12点を展示。与謝野晶子の歌や般若心経、百人一首などそれぞれの思いで作品をつくり、書のことばにあう表装の工夫がなされており、斬新さが見られる。丸山さんは手すき和紙にあわせて書をつくるなど、新風を感じさせる会場となっている。
● **「第10回洛神書作展」**(3.12～3.17)書家森山淡草さんが主宰する洛神会の26人が額や軸などで30点を展示。漢字の行草書から篆書作品などで、臨書や創作とバラエティに富む。森山さんの篆書の2点は造形を工夫している。緒方龍生さんは行草書で蘇東坡の詩を見せる。釈文がわかり易い解説で観賞にとてもよい。(S.K)

「伍水堂EXHIBTION～書道用品+遊ぶ。～」作家の許斐良助さんと作品《雑用ーうしろすがたのしぐれていくか》

ジェイ

熊本市大江本町6-9(味噌天神電停前)　☎372-8732

● **「内田勝弘　イメージデッサン展」**(2.1～2.10)白と黒の紙によるイメージデッサンと、青や白の色面の油彩。いずれも形と組み立てのしっかりしたもので、作者の前へ進もうという意欲が感じられる。
● **「第13回墨に遊ぶ五人展」**(2.11～2.20)書家5人が書に画をそえたりした小品18点を展示。平田抱山さんは「人並みはずれにや、ひとなみ」と書く。三嶋天鴻さんは「念ずれば花ひらく」と真民のことばを。後藤禎哉さんは「心」を淡墨で余白を生かし。岩本竹田さんは海達公子の詩に魚アジを描く。徳田翠雨さんは「地上の星」の詩に城の画をあてる。それぞれに自分なりの遊びがある。(S.K)
● **「墨に遊ぶ五人展」**(2.11～2.20)
● **「ジェイ企画展」**(2.21～2.28)
● **「第一回アギャンヌグループ油彩・水彩絵画展」**(3.1～3.10)
● **「グループ画展」**(3.11～3.20)油彩、日本画、写真、書、ステンドグラスの展示。
● **「東野女性絵画グループ展」**(3.21～3.31)一村謹三さん指導の油彩、水彩画の展示。(K.T)

上通郵便局プラザU

熊本市水道町3-37-1F　☎326-4123

● **「新春に遊ぶ書展」**(1.15～1.21)かな書道・青玄社幹部17人が17点を軸や額で展示。新春にふさわしい歌や句を加工紙にあでやかに書かれている。青玄社会長亜上村方さんは「あい子の句」をかき、赤星青汀さん、木上方華さん等のかなも見られた。又、年賀ハガキを加工したものに手書きの賀状59点も特別出陳されていた。
● **「第34回熊大書道部会卒業作品展」**(3.12～3.18)熊本大学書道部の部活動として、今年の卒業生のみの作品展である。6人が額や軸で11点を展示。漢詩などの創作で、篆書・隷書や行草書が主である。明るく素直な書でどれも端正に書かれており、好感のもてる作品である。元熊大教授の森山淡草さんも篆書など3点を賛助出品している。(S.K)
● **「Creators Wave2003」**(3.19～3.25)中島敬子(切手&レター)他・西田美紀(人形)・緒方健太郎(鉄/焼却炉)その他。作品展示とともに自分の名刺やメッセージを書き込めるスペースがあり、とても意欲的な発表に感じ取れた。(R.Y)

アートルーム　イケオ

熊本市新市街6-6　☎324-1414

● **「菊鹿フラワーバンク　押し花展 第1回　花だより」**(2.26～3.3)
● **「中川慈子展ーリズムと書ー」**(3.5～3.10)福岡教育大芸術コース4年の中川さんの卒業制作展である。まどみちおの詩「がぎぐげごのうた」は藁(わら)の筆で書いた作品で、リズムのある文字群が楽しい。《風》や《響》などの文字は、造形を工夫し、余白を生かした自分なりの書を作っているのが新鮮である。(T.M)
● **「桜華展(イラスト・漫画・横型 etc)」**(3.12～3.17)

鶴屋画廊／ふれあいギャラリー

熊本市手取本町6-1　☎356-2111

● **「～太陽がいっぱい～　川島見依子油絵展」**(2.19～2.24)華やかな色彩で描かれた海景を望んだ作品が並ぶ。作家活動の収益金の一部をカンボジアへの基金にあてるなど、川島さんの積極的な行動力が、作品のなかにあらわれている。バラなどの小品も、花の持つ生命力を映し出し、艶やかである。

「～太陽がいっぱい～川島見依子油絵展」作家の川島見依子さん

● **「墨に魅せられて　第3回墨栄会水墨画展」**(2.19～2.24)30余点の作品が並ぶ。各々、墨がおりなす五彩の表現の、好みに合うところを追及して、楽しく制作している様子が、作品に表れている。酒井博子さんの《踏のとう》は、春を待ちわびて雪中に芽を出すふきのとうの、愛らしく生き生きとした様子が表現されている。
● **「熊本県高校ラグビー2002写真展」**(2.19～2.24)ラグビーの試合最中の劇的な瞬間、試合後の表情など、青少年のさわやかな様子が捉えられた写真展。
● **「薩摩焼　橋本陶正山　茶陶展」**(3.5～3.8)薩摩焼でも、「白もん」、白薩摩と呼ばれる陶磁の展示。白い肌に金や朱などで彩色、豪華な雰囲気のある品々である。
● **「春の洋蘭展」**(3.5～3.8)月精込めて育て咲かせた洋蘭を展示。めずらしい種のものも多く、非常に豪華だった。
● **「浦口雅行　青瓷展」**(3.19～3.25)青磁の作品展。花生、鉢、茶碗など。釉薬の貫入(ひび割れ)の美しい、温雅な作品が並んだ。
● **「いけばな真生流創流75周年記念　花通路展」**(3.20～3.25)会場の高さ全てを使い切った大胆で大ぶりの作品から、卓上で楽しむ小ぶりな作品まで、それぞれの技量と経験を発揮した展示だった。春の花材の馥郁(ふくいく)とした香りが漂い、心落ち着く会場となっていた。(H.T)

島田美術館ギャラリー＆島田美術館蔵寸龍窟

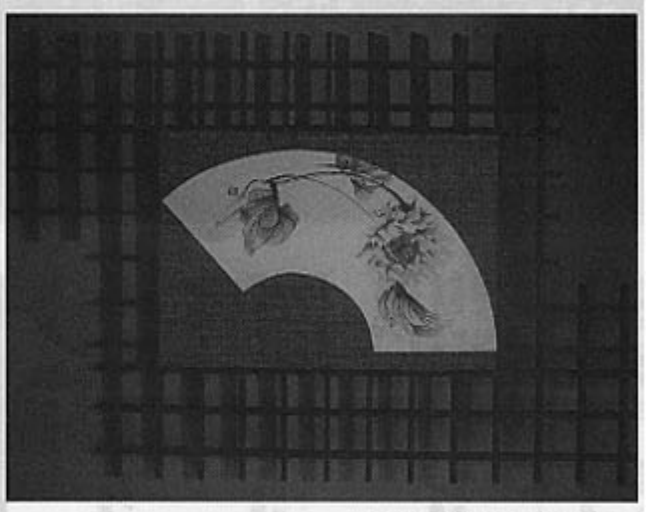
熊本市島崎4-5-28　☎352-4597

● **「「花」はな・華やかなるもの」**(2.1～2.25)在熊作家8名による展示。
● **「天馬訪れる大地」**(3.16～3.30)甲斐大策の作品展。(Y.H)

IRISギャラリー

熊本市上通町2-17びぷれす熊日会館7F　☎326-1666

● **「万歩路手描友禅展」**(2.19～3.3)コツコツ作品を作る姿勢を忘れずに活動していきたいという思いを込めて名づけられた「万歩路(まほろ)」の手描友禅展。山桜やカタクリ、おひなさまといったモチーフと友禅独特のぼかしの美しさとが融合した作品からは春の空気が感じられ、会場内を華やいだ空間に変えていた。
● **「墨の花展」**(3.4～3.17)新日本美術院会員中井菜香さんの作品展。墨の濃淡やぼかしによって草花の凛とした生命感と質感が感じられた。
● **「えーっと、エート、エコポスター展」**(3.22～3.30)グラフィックデザイン塾NAVYの生徒たちによるエコポスター展には、動物や地球をモチーフとしたポスターが並び「子どもにおしえること、これもエコ。」(下田真梨子さん)など、伝えたいメッセージをいかにデザイン化するかに工夫が感じられ、個性的な作品が多く見られた。(E.Z)



中井菜香さんの作品「墨の華展」

画廊喫茶南風堂

熊本市北千反畑町5-13宅建ビル1F　☎343-9664

● **「RKK学苑　金曜洋画教室展」**(2.1～2.10)雨森三郎さん指導のグループ展。
● **「アート・サラダ・グループ展」**(2.11～2.20)
● **「グループパレット展」**(2.21～2.28)講師は城武信さん。
● **「上村清房個展」**(3.1～3.10)
● **「女性絵画展」**(3.11～3.20)銀光会所属の女性の作品展。長く描いている人が多く、いずれも堅実な作風ながら、もう一歩殻から抜け出る工夫が欲しい。
● **「アートリッチ展」**(3.21～3.31)磯谷精一さん指導のグループ展。油彩15点の展示。(K.T)

MUSEUM INFORMATION

世界美術としての九州

九州力

きゅうしゅうりょく

開館記念展第3弾九州力が開催されました。
改めて九州の美術の力を検証することができました。

会場風景

会場風景

「かえっこショップ」

九州のグラフィックデザイナー12人によるポスター展

GRAPHIC MAN

2003年3月26日(水)～4月13日(日) GⅢ

熊本市現代美術館のギャラリーⅢ(GⅢ)企画vol.2として、「グラフィックマン」が開催されました。
本展は熊本を始め、九州各地で活躍する若き１２名のグラフィックデザイナーを紹介するもので、彼らの作品がGⅢのスペースをそのままアート空間へと変化させる、立体的な展覧会となりました。
熊本市現代美術館は九州で頑張るクリエーターを応援し、積極的にその発表の場を作ってまいります。また、展覧会のカタログ、ポスターなどのデザインはすべて地元で頑張るデザイナーにお願いし、そのオ能を遺憾なく発揮していただいております。

会場風景

次回:4月16日(水)～5月18日(日) 仏山輝美展

OPEN SKY

オープンスカイ|八谷和彦展

ポストペットからメーヴェまで

2003年4月19日(土)〜6月22日(日)

e-mail通信に革命を起こしたといわれるメールソフト「ポストペット」の発案をはじめ、人間を中心に据えた科学とアートの融合を試みるメディア・アーティスト八谷和彦の今までで最大規模の個展です。

《相互交信マシン》 写真：長川朱美

写真：松浦浩之

World News

◎上海美術館「上海ビエンナーレ」(2002.11.22〜2003.1.20)

本年で4回目を迎える上海ビエンナーレのテーマは、「URBAN CREATION」。学生を含めた多くの建築家が参加し、アジアの中心として急成長する都市の息吹を伝えるような内容となりました。日本からは、アトリエワンや坂茂などの建築家のほか、川俣正、津村耕佑らが出品しました。

≪ファイナルホーム≫ウエア・ブランド「FINAL HOME」を展開する津村の作品展示。

≪アトリエワン≫アトリエワンの自転車。テーブルと椅子つきでどこでもお茶をすることができる。

◎P.S.1 コンテンポラリー・アート・センター MoMA ニューヨーク「ーVideo Actsーバミラ&リチャード・クラムリッチ・コレクションとニュー・アート・トラストのシングルチャンネル作品」(2002.11.10〜2003.4.13)

パフォーマンスという、場所と時間が限定された行為を記録する手段としての映像、またビデオ編集を前提として行われたパフォーマンス、その1960年代なかばから1998年までのビデオとパフォーマンスの関係を物語る100以上の作品が、モニターやスクリーンで常時上映。マリーナ・アブラモヴィッチ/ウーライ、ナム・ジュン・パイク、ブルース・ナウマン、ヴィト・アコンチ、ビル・ヴィオラ、ビビロッティ・リストなど、歴史的作品を堪能できた展覧会でした。

SUITOTTO*KUMAMOTO

連続インタビュー NO.16

アーティスト

浜田知明さん

Chimei Hamada

この連載では、熊本にお住まいで、様々なジャンルで活躍されている方々に、活動に寄せる熱い思いを語っていただきます。第16回目はアーティストの浜田知明さんに楽しいお話を聞きました。

略歴／1917年生まれ。1979年アルベルティーナ国立美術館（オーストリア、ウィーン）、1993年大英博物館日本ギャラリー（ロンドン）で個展。その他日本各地の美術館で銅版画・彫刻展を開催。

―「九州力」展にご出品いただいていますが、まず、現代美術館の印象からお話聴えますか？

浜田：現代美術館ということで、あまりに前衛的で熊本で見に来る人がいるかしらと心配だったんですが（笑）。「ATTITUDE2002」展、「井手宣通の世界」展、「九州力」展と見せて頂いて、考えていたより幅広く、いろんな人に開かれている印象を持ちました。大変良いと思います。

―絵を描くことは小さな頃からお好きだったんですか。

浜田：私が育ったのは、およそ美術文化などとは縁のない田舎でした。しかし、小学校の校長をしていた父が当時発売された世界美術全集を持っていまして、アルタミラから後期印象派あたりまで、小学生の私は始終眺めて過ごしました。子供は記憶力がよいので、ルネサンスから後期印象派までの重要な作家の名前は大抵覚えていました。旧制の御船中学に進学し、富田至誠先生に出会いました。当時、田舎の中学に美術学校出の先生はめずらしく、熱心な御指導を受けられたことは幸いでした。先輩の井手宣通さんが東京美術学校に進学されていたり、井手さんや村上賢秀さんの描かれた石膏デッサンが準備室の壁に貼ってあり、それらを見ることが大変勉強になりました。東京美術学校進学後、知り合いもいませんので1年半井手さんの家に下宿させて貰いました。

―当時、光風会や帝展への出品は勧められませんでしたか？

浜田：いいえ。井手さんも私がそのような展覧会に興味を失いつつあることはうすうす感じられておられたのでしょう。美術学校の数年先輩達は大体において帝展に入選することが目標だったと思いますし、同じクラスでも多くの者はそのような考え方だったと思いますが、私の親しかった友人達は、当時美術雑誌に紹介され始めたシュルレアリスムとか、アブストラクトアートなどに関心を持つようになり、瀧口修造さんや福沢一郎さんなどを呼んで新しい美術思潮についての勉強をしたりしていました。ピカソが「ゲルニカ」を描き、グリが「内乱の予感」や「ナルシスの変貌」を描いたのもその頃です。仲間で「デ・ザミ」というグループを作って銀座の紀伊国屋で、展覧会をやったりしましたが、やがて日支事変が始まり、1939年卒業の年に現役兵として軍隊に入隊。美術界は戦争画の時代に入ってしまいます。学校の教室での人体写生と現代美術とがうまく結びつかず、どのような仕事をするか固まらないうちに戦争に行ってしまったわけです。戦地から帰って、さてどのような作品を作ろうかと考えた時、先ず頭に浮かんだのは数々不愉快な思いをした日本の軍隊への憤りを遮ることと、戦場で見たものを作品にしようということでした。その場合、抽象では自分の思いが伝わりにくいので具象的なスタイルをとることになりました。

―軍隊での体験は決定的な制作上の動機づけになっていますね。

浜田：それは本当につらかったけれど、今になってみると行ってよかったと思います。ゴヤの「戦争の惨禍」の頃とは、時代も戦争の形態も違いますけれども、戦争とはどのようなものかを自分の目で見ることができたことはよかったと思います。中国の風景や戦死者の展（しかばね）は本当に描きたいモチーフでしたが、兵隊には時間がなくて。小さなスケッチを描いただけです。その後召集されて伊豆七島の新島で1年2ヶ月過しましたが、こちらは土木作業ばかりでいい思い出はひとつもありません。

―戦後、東京で制作を開始しますね。

浜田：戦後9年間、雲戸に住みまして、主体美術協会とに分かれる前の自由美術家協会に10年近く所属しました。その間、森芳雄さんや会の内部で作った「9人展」というグループのメンバーと親しくしていましたが、グループの集まりには鶴岡政男さんも時折来てくれました。横浜市の中学校に8年間講師をしながら制作を続け、1957年熊本へ帰りました。

―帰ったときの、熊本美術界はどのようでしたか？

浜田：日展が中心でしたね、海老原喜之助さんが来られて、初めて熊本に現代美術が始まったと言っても過言ではないと思います。多くの若者が海老原美術研究所で海老原理論を学び、その出身者がその後熊本の美術界を担うことになりました。私は熊本では海老原さんとはあまり親しい付合いはなかったのですが、私がパリに1年滞在した時、海老原さんが私共のホテルへ引越して来られてから、約半年、親しくお付き合いをさせていただきました。包容力があり、芸術家としての見識も立派でした。

―浜田さんが東京ではなく熊本で制作活動をしているということが、今の熊本の若いアーティストに多大な影響を与えています。

浜田：熊本へ帰ることにした時、熊本には親しい友人もいないし、展覧会も見れなくなると考えたのですが、知人から、「どうせ東京にいたってそんなに人付き合いする方じゃないし、やりたいことは変らないだろう」と言われまして（笑）。確かに東京に住むより、雑事に時間を取られないで済むだけ熊本の方がましということはあります。

―浜田さんにとって「人間」とは何でしょう？

浜田：一番面白いモチーフですね。喜怒哀楽、愚かさ、醜さ、滑稽さ等々。そして性慾（しょうこ）りもなく繰返される戦争。最近のアメリカのあらゆる面での自信過剰、傲慢さ等。私自身人間が出来ていないせいか、そういう不愉快なことが作品になってしまう傾向があるんですよ（笑）。最近は版画は関店休業、専ら彫刻を作っています。今10点くらい出来ていますが、もう少したまってから発表したいと考えています。

―熊本で頑張る若いアーティストたちにメッセージをお願いします。

浜田：これは熊本の作家だけのことではありませんが、アメリカ美術の影響もあるのでしょうか、新しいこと、人のやっていないこと、まず人に認められたいという意識が強過ぎるのではないでしょうか。しかし、新しいか旧いかだけではなく、まず原点にかえって自分は何を表現したいのかということから出発すべきではないでしょうか。われわれはモノを作ることが好きで作家になったのですから、有名になるとかそのようなものは全て付録なんです。私は好きな仕事をして、それに何とか食べていけれればそれでよいと考えています（笑）。

―ありがとうございました。

（3月10日、於：ホームギャラリー、聞き手：南真宏）

今月の展覧会

- パリ　カルティエ財団　「ヤノマニ　森の精神」展(5.14～10.12)
- ロンドン　テート・モダン　「マックス・ベックマン」展(～5.5)
- ニューヨーク　グッゲンハイム美術館　「ピエール・ユイグ」展(～5.4)
- 福岡アジア美術館 (092-263-1100)　「白州正子の世界」(～4.27)
- 福岡市美術館 (092-714-6051)　「東京富士美術館所蔵　美の巨匠たち～西洋絵画400年」(4.18～5.25)
- 熊本県立美術館本館 (096-352-2111)　「ミレー、コロー、バルビゾンの巨匠たち展」(～5.11)
- 坂本善三美術館 (0967-46-5732)　「二子石義之・上村隆一展」(～4.20)
- 黄色アートの森 (0995-74-5945)　「新収蔵品展」(～4.24)
- ハウステンボス美術館 (0956-27-0001)　「ねむの木学園ナイーブアート展」(～6.1)

今月の4コママンガ

「ピノッキオ」

→

イラストレーション／緒方　恵子

編集後記

開館記念展の三つの展覧会が無事終了しました。これまでの日本では見られなかった先鋭的な現代美術の展覧会、評論の世界にも大きな反響を呼んだ、大胆にデザインされたプリーズーン、盛沢山のさまざまなイベント、そして全国でも初めての開館8時までの開館など、10万人を越えた全国からの来館者の方々にとって、この開館からの現代美術館の半年はどのように映ったことでしょう。芸術は長い、終わりのない精神生活の象徴です。一喜一憂せず、本質的な活動を展開してまいりたいと思っています。熊本市現代美術館をこれからもよろしくお願いいたします。

（学芸課長　南嶌　宏）

来館者紹介

養城 昌山 (S.K)
Shozan Kameshiro

武蔵の五輪書に「結つくことは死ぬることなり」とある。安定することは死ぬことだという。きびしい修行が常に大切だということか。

森山 淡草 (T.M)
Tanso Moriyama

詩、書、画、茶道において、清朝最後の大芸術家とされる師の記念館（上海）で、弟子たちと交流してきた。ついでに三峡下りを楽しんだ。素朴にして崇拝な神農民の船頭達には感動した。

田代 晃三 (K.T)
Kozo Tashiro

絵画や音楽や演劇もいいけど動きもしない小さな平面の絵になぜこんなに魅かれるのだろう。そういえば俳句はたった17の音だ。

学芸課より

本田 代志子 (D.H)
「九州力」の作品搬入で、会場で展示を見て、いろいろな音を感じました。

藏座 江美 (E.K)
展覧の仕事は大変ですが、実際に動いてみたいものです。生命力を強くさせられます。

金澤 麟 (R.K)
空気がさわやかで気持ちよいこの頃、緑本は春が早くてうれしいですね。

坂本 顕子 (A.S)
国際交流マシン、またまた活躍中！あなたの知らないあなたの姿が分かります！

富澤 治子 (H.T)
GWの予定は決まりましたか？「八月現代展」は5月5日9～中学生無料です！来てね！

竹田 晋 (A.T)
春というのは沢山いろんな生物（もちろん人間も）に不思議に作用していると感じる今日この頃です。

山室 りき (R.Y)
うぐいすは発声練習を終え、上手に「ホーホケキョ」と歌っているのでしょうか。

発行元／ART KISS LETTER　アート・キッス・レター Vol.17　2003年4月15日発行　©無料©
編集人／田中　幸人
編集長／南嶌　宏　　担当／富澤　治子
印　刷／熊本県印刷センター協業組合　　デザイン／松永　社デザイン事務所
発　行／熊本市現代美術館　〒860-0845　熊本市上通2-3
TEL.096-278-7503　FAX.096-359-7894